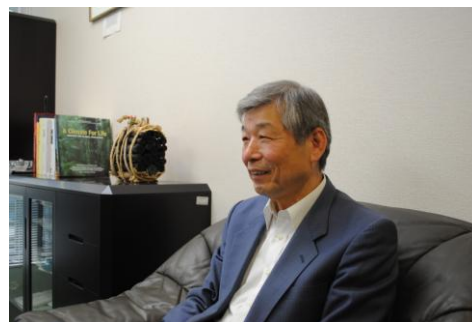


## 岩槻 邦男 さん

兵庫県立人と自然の博物館館長  
東京大学名誉教授



900分にも及ぶ連続セミナー<sup>1</sup>で「生物多様性のいま」を語られた岩槻先生。「人と自然の共生というのは、私がいて生物多様性をどう使うかというんじゃないし、私は生物多様性の一つのエレメントである。」と考えるべきだと強調されます。

### ◆植物の研究者になったきっかけ

よちよち歩きの頃に、お袋と実家のすぐ近くまで1時間かからずに歩いていきました。ほっとして木苺がなっているのを食べたんですが、その時にこの木苺はおいしいけど、これはだめだといってアイデンティフィケーションをしてくれたのを鮮明に覚えています。素地の中にはそういうものがあつたのかもしれませんが。

だけでも実際、なぜ植物を勉強するようになったか。新制中学が戦後でまだ混乱していて体裁が整っていない時に、自分らで倶楽部を作ろうというので、理科部と新聞部を作りました。植物を集めて標本を作ったり、新聞も自分らで謄写版で刷りました。

高等学校の頃は、もともと体が弱く、お医者さんのお世話になったので、将来お医者さんになろうと漠然とは思っていました。クラブ活動は、2つ上の兄の友達から勧誘のあった生物班に入りました。そこでは、フローラ、ファウナの調査に優れた先生方やすごく良い先輩のもとで、フローラ、ファウナみたいなことをやっていました。高校3年生ぐらいになると、生きるとはどういうことか、生きていくこと自体に関心移って、大学は理学部へ進んだんです。

当時京大助教授だった田川基二先生を中心として「シダ類談話会」が月に1回集まっていた、それに一遍こないかと誘われて、懇親会を含め楽しい雰囲気を味わいました。1回生の6,7月頃に、田川先生が何学科を希望しているのかと聞かれたので、「核酸や核タンパク質のことに強い関心があつてそういうことを勉強したいと思います。」といたら、何となく元気がないんです。先生を励ますようなことを言わなければいけないと思ったんでしょうね、言ったことが「だけどシダの勉強も折角ここまでやってきて楽しいから、一生趣味としてはやります。」

だけでも一番「シダ類談話会」に出るようになったことがきっかけだと思うんですけど、そこで専門家の先生のきっちりした話を聞いたり、夜の懇親会の場でディスカッション

<sup>1</sup> 連続セミナーの結果は、『生物多様性のいまを語る (のぎへんのほん)』のタイトルで、研成社から出版されています。

ョンされていることを聞いていると、その当時はそういう言葉は使いませんが、今で言えば生物多様性ですよ。生きるとはどういうことかということに極めるのに生物多様性は無視できないと、多様性の生物学という言葉を使うようになりましてけども、それに大学1年生は大学1年生なりに気がついてきて、核酸タンパク質も面白いけれども、分類の勉強もしてみたいと思うようになって。それではっきり憶えているんですけど、11月か12月頃に、先生の部屋へお邪魔した時に、「やっぱり僕植物に行きます、よろしくおねがいます。」って改めて言いました。その頃から植物を専門としようと思うようになりました。本当に選んだのは自主的に選んだんじゃない、周りの雰囲気だんだん自分をそこに連れて行って行ってくれました。

#### ◆アウトサイダーから主流派へ

分子生物学が華やかになる頃、1953年(S28)に大学に入学しました。1953年というのはワトソンとクリックがDNAモデルの論文をネイチャーに出した年です。生物学全体がDNAの生物学の流れを作ろうとしている時、分類学は時代遅れだと国際的にそうでした。日本もまともにそういう流れの中でしたから、主流派ではない、特に意識のなかで自分らはアウトサイダーだということを意識しながら研究を続けていました。そうしたら、ある時忽然とアウトサイダーではなくなっていたというのが現実なんです。1992年に生物多様性条約が結ばれるということが大体分かったのが、80年代の最後です。その頃になりますと東京大学の教授でしたから、いろんなお役所からも、biological diversity と biodiversity と何が違うとか、訳すにはどうしたらいいとか、そういう相談をしょっちゅう受けました。

#### ◆生物多様性の重要性 ～理解の入口としての絶滅危惧種～

IPCCの第4次レポートを見ると、人為・人工の影響で放出されたCO<sub>2</sub>が悪影響を及ぼすというのは90%前後の確立で言えるというふうに整理されています。一番CO<sub>2</sub>の影響が及ぶのが生物多様性であるといいながら、生物多様性に及ぶ影響は40%程度の確からしさでしかありません。確度を上げるためには、データベースの構築を進めることが極めて大切ですが、90%の確率で言えるというのは30年かもっと先になるかもしれません。その数値に基づいて一般の人に普及をすればいいというのなら、その内に生物多様性が壊滅してしまうということになりかねません。

データベースの構築を進めるけれども、一方でいま何かを発信しなければいけない。科学のやり方からいうと、モデルを作り、その中で如何に正確に予言するかということしかありえない訳です。そのモデルとしては、やはり絶滅危惧種というのが、特定できるし、客観化しやすいし、ある程度数が少ないので、正確なデータがとれます。

僕らはじめからそのことを100%意識してではないんですが、1980年代からそういう作業を始める訳です。その作業は実際ものを持って、種の保存法に繋がっていきます。

## ◆「人と自然の共生」という思想

### ～“生態系サービス”も理解の入口～

僕も最初の段階で生物多様性ということアピールするために絶滅危惧種を旗印にしてやってたんですけども、その内に今度は生物学者の側から生物多様性ということの問題にする時に、トキやとかパンダだけかなと思うようなことを言って、それでは生物多様性ということとは理解して貰えないじゃないかというので、ミレニアム生態系評価で「生態系サービス」という言葉が出てきました。ただ僕は極めてそちらには批判的なんです。僕だけじゃない日本の生態学者でも極めて批判的な人が多いですけど。生物多様性を語る時に、生物多様性というものを如何に利用するかという視点で生物多様性を見るわけです。特に今の一般の人にわかりやすいので、しばしば入口として使いますが、それで生物多様性の話を完結させたら根本的に間違っていると思うんです。日本的な人と自然の共生というコンセプトを世界に広げなかったら、地球のサステナビリティなんてあり得ないというのが私の考えです。人と自然の共生というのは、私がいて生物多様性をどう使うかというのじゃなしに、私は生物多様性の一つのエレメントであるという、そうでないといけない、共生ということはそういうことですよね。

### ～「人と自然の共生」という言葉～

「人と自然の共生」というのは、大阪の花博の時のサブテーマの一つに使われて、それがきっかけになって日本中で使われるようになったと整理されています。

花博継承財団がコスモス国際賞をつくる時に、この理念を伝えなければいけないというので、一生懸命イギリス人に内容を説明して作ったのが“**Harmonious co-existence between nature and mankind**”という英訳です。日本語にもう一回訳し直したら、「人と自然の調和ある共存」です。「調和ある共存」と「共生」というのは全然インパクトが違います。欧米には、もともと共生という概念がないから、大体いい考えですねと反応はしてくれますけど、日本人が腹に収まるようには、頭で考えているだけにしか見えないわけです。

### ～“もったいない”の本来の意味～

江戸の末期、パリやロンドンも100万都市だったそうです。ところが江戸は圧倒的に清潔だったそうです。江戸では、着物・晴れ着を何度も縫い直して縫い直したうちに、縫い目が痛んできますから、縫い目のところを外して、小さくして子供の晴れ着にして、子供の晴れ着にも使えなくなったら雑巾にした。雑巾が古びたら、燃料にした。燃料にした灰は畑に戻す。江戸には廃棄物がなかったわけです。何故なかったのか。万物が勿体です。その勿体たるは何かというと神様の授かり物というより神様そのものであるという考え方ですから、最後まで徹底的に使った。今は我々汚いと思いますけど当時の人は屎尿も勿体です。人間の体からでたものでも、無駄に捨てないで有効に使いましよう

とって、肥料にして、帰りに野菜を積んで帰った。

#### ◆「鎮守の杜」のはじまり、「里山」のはじまり

八百万の神の住まいする日本列島の緑のなかの一部を資源を補給するためには伐開しないといけなかった。伐開して荒らして、自然破壊を新石器時代のご先祖様たちがやって、その破壊した後を維持して、人里で生活するようになった。

資源が安定供給されて仲良く暮らせるようになって、薪炭材みたいなものを裏山で補充的に使うようになった。だけどそうやって自然破壊をしたことに対して、当時の人は八百万の神に対して申し訳ないと思ったものだから、自分たちの氏を守ってもらう氏神様として、奥山と同じような森を人里に維持したのが鎮守の杜です。

中国の社稷は森自体が神であるというものですが、社稷というのは氏の文化を維持するものだというので、既に秦の時代に攻め込んで相手の部族をやっつけたら社稷を潰すことが戦争に勝ったということの意味するようになったため、春秋の頃になったら社稷は残ってないんです。それが日本には鎮守の杜として残ってきて、それこそ明治維新の後で、南方熊楠が捕まったみたいな事件が起こる、その神社合祀が起こるまでは、少なくとも、日本人の自然との付き合い方というのが、ずっと生き残ってきたということです。

人里、里地で豊かな資源の下で生活をして、里山を補助的な資源の山地として使うということになったら、奥山はあまり荒らさないで、八百万の神はそこにお住まい頂くということで、野生動物は奥山で安心して生きるし、人は人里で安心して生きるし、里山を有効に使う、奥山に住んでクマかって、おなかですいたら里山へ降りてきたときに、里山は屈強な若者が働いていますから、やっぱり、クマも賢いから逃げて帰るということになって、人と野生動物とは、まさに共生をしていました。だから江戸、明治維新までは日本列島で、中型・大型の哺乳動物で絶滅種は一種も作ってない、地球上でも珍しい例なんだそうですよ。

日本の里山というのは、ユネスコのいうコアゾーン、レジデンシャルゾーンの間のバッファゾーンほどコンティニュアスじゃないですけどね、少なくとも野生動物を奥山に閉じ込めるという程度にはコンティニュアスです。そういうゾーンとして形成していたというのが、日本の特徴です。

SATOYAMA イニシアティブは、人と自然の共生ということを訴えるためのイニシアティブであって欲しかったんですけども、今は必ずしもそうっていないんです。僕は日本人はそういうふうにご先祖様のありがたい伝統を引き継いできたから、それを世界に向けて発信する責任があると思います。

◆日本を代表する里山を挙げていただけますか。

僕が一番里山としてよく話題に使わしていただくのは、兵庫県黒川地区の里山です。それと、今住んでいる横浜市青葉区の自宅からこどもの国との間に「寺家ふるさとむら」というのがあって、横浜市が補助金を少し出して、お百姓さんに農地を続けてもらっています。そのあたりの里山も好きです。

2010. 6. 11 インタビュー

聞き手 田村省二 (COP10 推進チームリーダー)

岩槻邦男 (いわつき くにお)

1934年 兵庫県に生まれる

1963年 京都大学大学院博士課程単位取得退学

1965年 同大学院学位取得終了 (理学博士)

1972年 京都大学理学部教授

1981年 東京大学理学部教授に併任

1983年 東京大学教授に移籍

(同大学理学部附属植物園長に併任、1992年評議員に就任)

1995年 以降、立教大学理学部教授、東京大学名誉教授、放送大学教授 (~2005年)

2003年 兵庫県立人と自然の博物館館長

2007年 文化功労者

